

想 創 奏

第20号

発行人 荒川輝男
編集人 林 直輝
〒536-0013
大阪市城東区鳴野東 3-18-5
社会福祉法人そうそうの杜
Tel 06-6965-7171
Fax 06-6167-2622

障害者ケアマネジメントはどこへ…？

今回は、障害者ケアマネジメントのオリジナル「とことんわたし中心プラン」の特集号として発行する。

平成12年の介護保険の導入と共にケアマネジメントが制度化された。施行前に違和感を持ちながらも直接的には関係なかったので半ば傍観していたが、法が施行されて全体像が見えてくるにつれて疑問がふつつつと湧き出してきた。

この経過を受けて障害分野における本来のケアマネジメントとは？というテーマで勉強会をスタートしたが、この間、厚生労働省は各都道府県政令指定都市を対象としてケアマネジメント従事者研修、これを受けて都道府県政令指定都市において伝達講習と矢継ぎ早に次へ向けた障害者ケアマネジメント従事者の養成講習が開催された。すぐにでも障害者ケアマネジメントがスタートできる環境作りを目指していたものと思われるが、障害者自立支援法のスタートと同時にケアマネジメントがどこかに消えてしまったのである。法の中では、従来の相談事業に加えて指定相談事業として事業者指定がなされたものの実際の生活を支えるための相談事業としての役割を求めるものではなかった。

厚生労働省の障害者ケアマネジメントの様式については満足はしていなかったが、当然障害分野に導入される場合には国の様式に統一されたものが示されると予想していたが、法が施行されるときに様式が示されなかった。

また、サービス利用計画費が報酬化されたが相談事業の対象者が限定されるという当初の予想とはかけ離れた結果になってしまった。しかし、ここで様式が示されなかったことに対しては、新たな試案を提示できる環境でもあったし、ここに我々の「とことんわたし中心プラン」の必要性を見出すことができた。

基本的には、介護保険と同様に対象者全てがケアマネジメントの対象として捉えるべきだし施策として確立すべきである。制度で中途半端にくることで本当に必要な人がケアマネジメントの対象にならないという矛盾に対し、報酬が伴うからケアマネジメントの対象、伴わないから対象ではないということではなく、実践していく中でよりよいケアマネジメントを行い制度として根付いていくことを目指していきたい。

「とことんわたし中心プラン」の講習会については、内容を見ていただいて是非多くの方の参加をお願いします。内容的に充分納得していただけると確信しています。(荒川 輝男)

地域自立支援協議会の行方

大熊章夫

自立生活を送る障害者のケアマネジメントを保障する、サービス利用計画作成費が報酬化されて、1年が経過しました。城東区内でも、単身生活を送る身体・知的・精神障害の方数十人がケアマネジメントの支援を受けておられます。計画を作成する相談支援事業所も、現在区内で7ヶ所の事業所が指定を受けています。今のところ、各事業所とも、母体になる施設・作業所の利用者種別に合わせて、相談対象者もその障害種別が偏っています。もともと知的障害者対象の作業所では知的障害者が、精神障害者対象の作業所では精神障害者が、というように一種「住み分け」がなされています。

地域自立支援協議会は、自立支援法の理念である「3障害一元化」にあわせて、地域ごとに相互のネットワークを構築することで、総合的なケアマネジメントを提供することを目的としています。大阪市では、現在各区で組織化されている障害者支援専門部会を、自立支援協議会に再構成することを検討している状況です。

このように、3障害の社会資源が効果的にリンクし、複合的な相談ケースに対応できることは重要で、そのことにより現在制度の狭間にある高機能自閉症や高次脳機能障害のある方への支援も開発されていくと考えます。ただ、個人的には、高齢者支援・児童支援との関係ももっと考えていかなくてはいけない、と思っています。高齢・児童の虐待相談に私自身が関わるなかで、特にネグレクト(介護放棄)に関しては介護者の知的障害・精神障害が絡むケースが多い、と感じているからです。ネグレクトで要介護者が病院に運ばれたり通報されたりするケースで、当の介護者と面談すると、障害者手帳を持っていないものの、知的・精神障害、あるいは高機能自閉症などではないかと推定されることがあるのです。本来なら介護能力の問題であって、その介護者自身の障害をサポートしないといけなかったのに、未発見であったために、「虐待した」「介護放棄した」と社会的に非難されてしまうのです。高齢者自身の支援だけでは、こうした問題は解決されるはずもなく、家族全体を視野に入れての支援が必要となるのです。

ですから今後は、協議会では3障害の一元化だけでなく、高齢・児童・障害といった垣根を越えた支援の連携のあり方を、どのように作っていくかが、課題だと思っています。その仕組みづくりをどうしていくのか、議論を深めていきたいところです。

地域生活を支えるための
知的障害者ケアマネジメント

とことん「わたし」中心モデル講習会

支援費制度、障害者自立支援法と相次ぐ大規模な制度転換で、障害のある方はもちろんのこと、私たち支援者は戸惑い、これからの障害者福祉に大きな不安を抱いています。しかし、こんな時代だからこそ、私たちは、本当に大切なことを見失ってはならないのではないのでしょうか。制度がどのように変わろうとも、必要な支援は変わりません。制度の枠内で提供できる支援ではなく、本当に必要な支援とは何かを問い続けていかなければならないのです。知的障害のある人の支援に携わってきた私たちこそが、一体となって、本当に必要な支援とは何かを訴えていかなければならないのです。



私たち障害者ケアマネジメント勉強会では、本来あるべきケアマネジメントとは何かを考え、その実用化を目指して検討を重ねてきました。その結果、知的障害のある人のエンパワメントと権利擁護に着目して、“とことん「わたし」中心モデル”を開発しました。既に、ケアマネジメント勉強会参加者の所属機関で実践が開始され、反響が得られています。このモデルのアセスメントシートには、利用者や周囲の人の言葉や行動を記入するだけでなく、支援者がそれらをどのように理解し、今後のあり方を考えているかを記入します。そのため、支援者には、利用者のことをより深く知ろうとする姿勢が生まれているようです。また、このモデルの計画作成は、利用者に関わる支援者ら自身が、利用者の支援の方向性についてどのように考えているかをシートに記入することから始められます。そして、それらのシートをもとに、利用者自身を含めた関係者によるケース会議が開催されます。多角的な見解が示されることによってケース会議の出席者は利用者の全体像を捉えやすくなります。また、支援者がそれぞれに深く考察した見解を持って話し合うため、多くの意見が交換され、より深く利用者の状況を理解して計画を作成することができるとの声が聞かれています。

今回の研修会によって、“とことん「わたし」中心モデル”を多くの方に知っていただき、活用していただきたいと考えています。そして、研修会にご参加いただいた皆様から意見をいただき、ともに改良し、発展させ、共通の方法を確立していきたいと思っています。実際に活用していただけるよう、研修会では、次頁のようなプログラムを企画しています。皆様のご参加をお待ちしております。



開催要項

- ◆ **開催日程**・・・A 日程:平成 19 年 9 月 14 日(金)～16 日(日)の 3 日間
 B 日程:平成 19 年 11 月 23 日(金)～25 日(日)の 3 日間
 ※申込用紙にて、どちらかの日程をご選択いただきます。
- ◆ **開催場所**・・・城東会館(予定)
- ◆ **受講料**・・・2000 円(資料代) ※受講初日に、受付にてお支払いください。
- ◆ **募集人数**・・・各日程 20 名(計 40 名) ※各日程、定員になり次第締め切らせていただきます。
- ◆ **応募方法**・・・この案内の最終頁にある申し込み用紙にご記入の上、FAX にてお申し込みください。
 もしくは、メールにてお申し込みください(sou-sou.com をご覧ください)。3 日間全ての日程の受講が条件となります。
- ◆ **研修プログラム**・・・以下の通りです。都合により変更する可能性があります。

9:00—	開場・受付開始
9:30—10:00	開会の挨拶
10:00—12:45	関 宏之氏講演「障害のある人に向き合う」及び、質疑応答
12:45—13:30	昼食休憩
13:30—17:00	とことん「わたし」中心モデルの考え方・作成方法の説明など

9:00—	開場
9:30— 9:45	挨拶と本日の予定の説明
9:45—11:00	参加型・模擬面接の実施(質問受付)
11:00—12:00	とことん「わたし」中心アセスメントシートの作成・話し合い
12:00—13:00	昼食休憩
13:00—14:00	とことん「わたし」中心アセスメントシートの発表・討論
14:00—15:00	とことん「わたし」中心計画の考え方・作成方法の説明など
15:00—16:00	とことん「わたし」中心計画 1 枚目の作成
16:00—17:00	とことん「わたし」中心計画 1 枚目の発表・討論
17:00—17:15	アンケート記入、第二日目終了の挨拶

9:00—	開場
9:30— 9:45	挨拶と本日の予定の説明
9:45—10:30	とことん「わたし」中心計画 2 枚目の作成
10:30—12:00	とことん「わたし」中心計画 2 枚目の発表・討論
12:00—13:00	昼食休憩
13:00—16:30	小澤先生講演「ケアマネジメントの現状とこれから」
16:45—17:00	研修全体の感想・意見など 研修方法の紹介、アンケート記入、研修終了の挨拶など



講師紹介

講習 1 日目の講演は、以下のお二人の先生方による講演です。

広島国際大学 医療福祉学部 教授 関 宏之

東洋大学 ライフデザイン学部 教授 小澤 温



“とことん「わたし」中心モデル”とは・・・

とことん「わたし」中心モデルは、知的障害のある人の「エンパワメント」と「権利擁護」の実現を理念としてあげています。「利用者の主体的な参加(利用者と支援者の協働)」「利用者の役割の重視」「様々な変化の可能性」を重要な考え方としています。

このモデルは、2 群に分かれたアセスメントシートと、“とことん「わたし」中心計画”から構成されています。アセスメントシートは、【フェースシート】、【生活暦】、【連絡先一覧】の 3 つと、ケースとの出会いの際に用いられる【支援の方向性とその背景】の合計 4 種類からなるアセスメントシート 1 群、そして、【人との関係】【日中活動など】【食事・身の回りのこと】【経済的なこと】【健康に関すること】【安全管理に関すること】の 6 種類からなるアセスメントシート 2 群によって構成されています。とことん「わたし」中心計画は、【計画シート1(思いの整理と理解)】と【計画シート2(責任の分担)】から成ります。

活用手順については、まず、アセスメントシート 1 群を用います。【フェースシート】、【生活暦】、【連絡先一覧】のシートに記入することは、ほとんどが変更することのない固定的な情報であり、新たな情報が得られた際に書き加えることによって対応することができます。【支援の方向性とその背景】については、ケースとの出会った時の最初の印象を残しておくためのものであり、書き換えられることはなく、一定時間が経過した後、ケースを振り返って考察する際に活用されます。次に、アセスメントシート 2 群を用います。6 種類のシートのうち、支援者が利用者に応じて必要と考えられるシートを選択して記入します。変化した事柄や新たな情報については、記入日とともに書き込みます。その変化が大きい場合は、同じ種類のシートを追加し、再び、記入日を明確にして書き込み、同じ種類のシートごとに蓄積します。はじめに必要と思われなかったシートでも、途中から必要になった場合は、追加します。次に、それら全てをもとに、計画を作成します。計画作成にあたっては、担当支援者が【計画シート1(思いの整理と理解)】を記入(複数で担当する場合はそれぞれに記入)します。それらをもとにケア会議が開催され、【計画シート2(責任の分担)】が完成します。なお、2 群のシートは、状況の変化に応じて新しく追加され、複数のシートが追加されるか、または、大きな状況の変化が生じれば、それに応じて計画も新たに作成されます。※詳しくは sou-sou.com をご覧ください。

このモデルを考案するにあたり、アセスメント様式作成においては、特に、「実用可能であること(記入量・記入形式・情報の整理など)」、「利用者の全体像をとらえること」、「支援過程全体を通じたアセスメントを反映すること」、「支援計画の作成に結びつくものであること」に着目しました。具体的には、「必要な領域を選択して記入する形式」、「チェック項目の活用」、「詳しい説明入りの記入式(記入例の提示など)」、「“固定的な情報”と“変化する情報”の区分」、「加筆形式(シートの追加など)」などを取り入れました。また、計画の様式作成においては、アセスメントと同様に、「実用可能であること(記入量・記入形式・情報の整理など)」、「利用者の全体像をとらえること」、さらに、「利用者の役割」を重視し、「誰の思いであるのかを明確に書き分けること」、「全ての状況を捉えて支援者に考えさせる機会になること」、「利用者と支援者の協働によって完成されるものであること」、「利用者と支援者の役割を明確にすること」を目指しました。

このモデルは、シートや活用手順だけでなく、研修を重視していることにも特徴があります。今回の講習後、受講して下さった皆様を対象に、半年から1年後、追加研修を予定しています。



会場周辺の地図



主催・・・障害者ケアマネジメント勉強会
事務局・・・社会福祉法人そうそうの社
大阪市城東区鴨野東 3-18-5
電話 06-6965-7171
FAX 06-6167-2622
ホームページ sou-sou.com
メール sou-sou@gol.com

所在地 大阪市城東区中央 3-5-11

地下鉄長堀鶴見緑地線「蒲生四丁目」下車 徒歩 3 分



とことん「わたし」中心モデル講習会 申し込み用紙

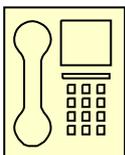
送り先

社会福祉法人 そうそうの杜

地域生活支援センターあ・うん : FAX 06-6167-2622

Mail sou-sou@gol.com

希望日程		A 日程		B 日程	
どちらかに丸を付けて下さい。					
所属				氏名	
所属の住所					
連絡先	TEL	FAX			
メールアドレス					
講習会へのご希望等がございましたらお書きください。					



ご不明な点等ございましたら、事務局: 社会福祉法人そうそうの杜(06-6965-7171)までお問い合わせください。(担当 ^{よしみ} 吉見)

ココニアルタメニ(第5回)

～“とことん「わたし」中心モデル”とは何か(蛇足的解説)～

松藤 栄治

たぶん別のページに報告記事が載っていると思いますが、去る4月28日に社会福祉法人そうそうの杜主催のシンポジウム『今だから語ろう障害福祉の未来』が開催されました。日比野教授(佐野短期大学)の司会のもと、松端(まつのはな)准教授(桃山学院大学)をはじめとする4名のシンポジストによる講演と、会場との質疑応答が行われましたが、各シンポジストの立場や考え方の違いを反映して、様々な角度から「障害福祉の未来」が語られ、参加者それぞれが自分の関心に引き付けていろいろ考えることができる、面白いシンポジウムとなりました。当日は私も一聴衆として会場にいたのですが、個人的な感想としては、シンポジストの皆さんの話からは、明るい未来の展望というよりは、むしろ障害者運動が現在直面している困難や危機感——端的に言えば、障害者自立支援法とその背景にある近年の社会福祉をめぐる情勢に対して、いかに抵抗していくか——の方が強く感じられ、今われわれが置かれている現実から魅力的な未来を構想することがいかに難しいかを、逆に印象付けられました。しかし、今われわれが捉われている閉塞感に風穴を開けてくれるものが、誰もが希望を抱ける「障害福祉の未来」であることは間違いないでしょう。それゆえ、口先だけのスローガンではない、この現実から地続きの具体的な改革のヴィジョンを構想し、それを社会に問いかけていくという課題を、ぼくたちは引き続きあきらめてはならないと思います。

さて、それはそれとして今回の本題に入りますが、このシンポジウムでは本編の前に、森本久美子さん(大阪市立大学大学院)による講演『障害者ケアマネジメントへの提案～とことん「わたし」中心モデル～』が行われました。この講演は、そうそうの杜の荒川さんを中心に場所やメンバーを変えながら数年来続いている「障害者ケアマネジメント勉強会」という有志の勉強会において検討・試行してきた、障害者ケアマネジメントの新しい手法“とことん「わたし」中心モデル”(以下「わたし」モデル)を紹介する趣旨の企画でした。が、当日参加された方はご存知のとおり、森本さんのお話は自立支援法における障害者ケアマネジメントの不十分さに関する報告がメインで、残念ながら肝心の「わたし」モデルの内容にはあまり触れられませんでした(そのかわり資料として様式と記入例が配布されましたが)。「わたし」モデルの詳細な説明は、9月と11月に開催予定のこのモデルの講習会に参加してのお楽しみ、ということだったのかもしれませんが、正直肩すかしというか物足りなさを感じるとともに(他の人からも同様の感想を聞きました)、このままでは講習会の参加申し込みも低調になるのではないかと心配されるところです。

そこで今回の『ココニアルタメニ』では、余計なお世話ですが講習会の宣伝も兼ねて、講演では触れられなかった「わたし」モデルの核心(!)について解説してみたいと思います。もっとも私自身は、シンポジウムの配布資料には光栄にもこの勉強会のメンバーとして紹介されていましたが、実際は

新参加者のメンバーであり、また勉強会の場においても、森本さんが作成してきた資料に対して重箱の隅をえぐるような鋭いコメント(なんだそりゃ)をする程度の貢献しかしていませんので、そんな私に「わたし」モデルについて何か述べる資格があるのかどうか微妙なところではあります(というか、普通に考えたら無いでしょう……)。ですので、以下の解説には、森本さんや他の勉強会メンバーの考えと一致していないところや、私の妄想でしかないところが多く含まれているということを、あらかじめお断りしておきます。この原稿を読んで講習会に参加してみたら、講習内容が期待していたのと全然違っていたとしても、当方は一切関知いたしませんので、あしからず(笑)。

1. “とことん「わたし」中心モデル” の概要

では、はじめに “とことん「わたし」中心モデル” という呼び名で今回われわれが提案しようとしているものが何なのかについて、概要を紹介しましょう(1)。

「わたし」モデルとは、支援費制度の施行以前から厚生労働省が普及に努めている(「努めていた」と過去形でいうべきかもしれませんが……)障害者ケアマネジメントの手法に対する不満から、アメリカのミネソタ州で 1989 年に発表されたケアマネジメント手法「個人将来計画(Personal Futures Planning)」をベースに、日本の知的障害者支援の現場における実態に合うように改良を施した、新しい障害者ケアマネジメントのシステムです。

このモデルの基礎には「利用者の主体的な参加(利用者と支援者の協働)」「利用者の役割の重視」「様々な変化の可能性」が重要な考え方としてあります。従来の障害者ケアマネジメントにおいても、これらの視点が全く無かった訳ではありませんが、ケアマネジメント過程における副次的な要素として考慮されていた程度だったと思います。これら3つの理念に対して、正面から自覚的かつ具体的に取り組んだものが、この「わたし」モデルであるといえるでしょう。

「わたし」モデルを実践するにあたっては、従来の様式に改良を加えた新しいアセスメント様式と計画様式を使用します。この新様式の開発にあたっては、アセスメント様式については「利用者の全体像をとらえること」「支援過程全体を通じたアセスメントを反映すること」「支援計画作成に結びつくものであること」「記入する情報の内容や量が実用可能であること」を目指し、具体的には「必要な領域を選択して記入」「チェック項目の活用」「詳しい説明入りの記入式」「固定的な情報と変化する情報を区分して記入」「シートの追加等による加筆形式」を取り入れました。なお、アセスメント様式はシート1とシート2の2種類に分かれ、シート1群に不変の固定的な情報(氏名や生年月日、生活歴など)を、シート2に時間とともに変化していく流動的な情報(日々の暮らしの様子や人間関係、心身の状態など)を記入していくようになっています。

計画様式については、アセスメント様式と同様に「利用者の全体像をとらえること」「記入する情報の内容や量が実用可能であること」のほか、上述の「利用者の役割の重視」という考え方に基いて「誰の思いであるのかを明確に書き分けること」「全ての機会を捉えて支援者に考えさせる契機になるものであること」「利用者との協働によって完成されるものであること」「利用者との支援

者の役割を明確にすること」を目指して、様式を工夫しました。こちらシート1とシート2の2種類に分かれ、利用者・関係者の思いや、アセスメントを通してつかんだ支援者側の理解を記入するシート1と、具体的にどのような取り組みを利用者・支援者それぞれの責任において実施するかを整理するシート2とがあります。

この新しい様式を用いたケアマネジメントの進め方は、まず担当のケアマネジメント従事者(死語?)が、利用者・関係者から聞き取りや日々の関わりを通して得た情報を、アセスメント様式のシート1群(固定的な情報)および2群(変化する情報)に記入していきます。次に、これらの情報を元に担当者が計画様式のシート1を作成(複数で担当する場合はそれぞれが作成)します。そして、これを元にしてケア会議を行い、利用者、関係者とともに話し合っシート2を作成し(これで計画完成)具体の支援がスタートするというのが、このモデルの基本的な流れです。なお、2群のシートはその後の状況の変化に応じて随時追加されていき、その変化が大きくなれば計画を作り直すこととなりますが、これはアセスメント(モニタリング)と計画作成(計画変更)とがダイレクトに連動したシステムを目指したものだといえるでしょう。

以上が「わたし」モデルの概要ですが、イメージは伝わったでしょうか? なお、このモデルは知的障害のある利用者のためのケアマネジメントを想定して開発されたものですが、原理的には精神障害のある人や認知症のある高齢者、要保護状態の児童など、意思能力にハンディキャップのある利用者一般に対して広く応用が可能なものですので、知的障害者福祉関係者以外の方も、講習会に参加すると参考になると思いますよ(ただし講習会では、専ら知的障害者支援を想定した講習内容になるはずです)。

では次に、そもそもなぜ私たちがこのようなモデルを考えたのか、従来の障害者ケアマネジメントの何を批判し、それをどう乗り越えようとしているのか——要は、このモデルの背景にある障害者支援の哲学とはどのようなものかについて、説明しましょう。

2. 「わたし」の可能性を最大限に引き出す障害者ケアマネジメントを目指して

(1) 「わたし」の実存の時間的構造

われわれ勉強会では「利用者が持つ可能性を最大限に引き出すケアマネジメント」を目標に、どのようなアセスメントや計画作成を行えばよいか、という観点から検討を行いました。この観点から従来の障害者ケアマネジメントに対して感じる疑問を突き詰めていくと、どうやらそれは、従来のモデルが前提としている人間像が、実際のわれわれの生のあり様(実存)とは合致していない点にあることが、だんだん明らかになってきたのでした。

そもそも、われわれの実存とはどのようなものでしょうか。それは、いま現在の「わたし」を基点に、背後には生まれてから現在に至るまでの来歴(さらに遡れば親や祖父母、先祖の来歴まで)を引きずりつつ、前方には様々な方向性を有する生の可能性を見出しながら、未来へ向かって進み続ける、一種の時空連続体のようなものとしてイメージできるでしょう。そして、この「わたし」という時空

連続体は、現在の「わたし」を取り巻く周囲の人や物から直接的に受ける影響のほか、過去や未来から届いてくるもの（たとえば過去の生活習慣や病歴、トラウマ、将来の展望等）の反響の中で、絶えず変化し続けている存在なのです。

しかし、従来の障害者ケアマネジメントの手法は、こうした実存の時間的構造を十分に捉えることに適したシステムとは言い難いものでした。従来のモデルでは、ケアマネジメント過程は「インテーク」から始まり「アセスメント」→「計画作成」→「実施」→「モニタリング」を経て「終了」に至る（ただし「モニタリング」で利用者のニーズ等の変化が確認されれば再び「アセスメント」→……のサイクルに回帰する）という、それぞれのステップが時系列に沿って単線的に進むプロセスとされており、ここでは各ステップの時点における利用者の状態と、未来における計画目標だけが問題とされてきたのでした。

要するに、「わたし」とは時間の流れの中で変わり続ける動的・流動的な存在なのですが、これまでの障害者ケアマネジメントは、紙芝居の登場人物のような動きのない静的・固定的な人間像を暗黙の前提としており、われわれの実存が有している変化のダイナミズムを見逃している点に限界があったといえるでしょう。

それゆえ、この「わたし」が有する可能性を最大限に引き出すためには、「わたし」の実存と同型の時間的構造を有したケアマネジメント・システム（様式や進め方等）の開発が必要であるということが、われわれ勉強会メンバーの共通認識となったのでした。

（2）“時間的な厚み”のあるアセスメント

そこで、まずアセスメントについてですが、従来の障害者ケアマネジメントにおけるそれは、利用者本人や関係者からの聞き取りを行った時点における利用者の状態——「～したい」という欲求・欲望の有無やADLの程度、身辺処理や家事をどうやっているか、人間関係や経済状況など——を捉えるものでした。いわば聞き取り時点における利用者の生活ニーズのスナップショットの作成が、従来考えられてきたアセスメントであったといえるでしょう。

しかし、先に述べたように、われわれの実存が過去と未来の両方向へと広がる構造を有している以上、現在の状態だけを捉えるアセスメントが不十分なのは言うまでもありません。また、利用者は絶えず変化し続けています（しかも領域・項目毎に変化する速度は異なります）が、従来のアセスメントでは、この絶え間ない変化を追いきれていません。

ここで求められているのは、利用者の絶え間ない変化をフォローし続けることで、現時点の状態とそこに至るまでの来歴、そして今後の変化する可能性とを同時につかみとることができる、言うなれば“時間的な厚み”のあるアセスメントだといえます。

そのために「わたし」モデルでは、利用者との日常的な関わりが即アセスメント過程でもあると位置づけ、関わりの中で変化があれば随時アセスメントシートに追記していくこととしました。そして、その作業をできるだけ容易にするために、領域毎に独立したシートを用い、変化のあった項目だけ

を記入して、そのシートをアセスメントシートのセットの中に追加していく方式を採用したのです(2)。

こうして日々シートを追加していくことを通して、やがてアセスメントシートのセット自体が、利用者の実存と同型の時間的な厚みを備えていくことになり、利用者の生活の最新のスナップショットと、項目ごとの通時的な変化のダイナミクスとを、ひとつのアセスメントセットから読み取ることが可能になります。その結果、たとえば地層を掘り起こすように過去の来歴をたどり直すことで、新たなアプローチの手がかりを見つけることができたり、過去から現在に至るデータを演繹することで、今後のライフサイクルの変化について予測を立てることができるなど、利用者が秘めているポテンシャルを最大限に追求することが可能になるのです。

(3) “いまの「わたし」” が中心にある計画

また、ケアマネジメントという援助手法の大きな特徴は、計画に基づく支援(サービス)の提供という点にあります。この計画作成についても、従来の障害者ケアマネジメントには、われわれの実存の時間的構造に合致していないところがありました。

従来のモデルでは、まず将来実現したい生活の姿を長期的な計画目標として設定します。そして、その実現のためにクリアしておかなければならない諸課題を中期的な計画目標として設定し、さらにその中期的な目標を達成するためにクリアしておかなければならない個々の課題を短期的な計画目標として設定して、その目標の実現にむけて具体の支援を提供するという組み立てになっていました。いわば、未来のゴールの地点から、そこに至るまでの道のりを逆算し細分化したものが、現在提供すべき支援ということになっていました。

しかし、このように段階的な目標を設定するやり方は、どうもうまくいかないということが、現場の実態として勉強会で報告されていました。たしかに、未来の目的や計画のために現在すべきことを考えて行動するというのは、現代人なら誰もが当たり前に行っていることです。しかし、たとえ利用者とともに作成した計画であっても、「わたし」のリアルタイムの欲望や関心事ではない計画目標から導き出された支援には、根本的にどこか無理があり、また、その結果実現している現在の暮らし——未来のための手段・通過点としてのみ位置づけられた現在の生は、やはり端的に貧しい生であるといえるのではないのでしょうか。人間の生が、まさに生きられている現在それ自体において喜びに充足されていない、いいかえれば生の主体性が未来の目標の側にあり、現在の自分がその奴隷となっているような状態は、人間の生の本来的なあり方ではなく、いわば未来へと疎外されている状態だといえるでしょう。おそらく、この点を知的障害のある人たちは敏感に感じていて、現在の生を抑圧するような計画作りに対して、暗に抵抗・拒否しているように思われます。

それゆえ「わたし」モデルの計画作成では、あえて短期・中期・長期といった時間的な構造化は行わず——もっとも、人は 100 パーセント刹那的に生きることもまた不可能ですし、将来のためにコツコツ積み上げていかなければ実現できない種類の案件も間違いなくありますので、時間的な構造

化を行うこと自体を全く否定・禁止している訳ではありません——、長短さまざまなスパンを有する目標や課題が、同列に並ぶものとなっています。むしろ計画作成にあたっては、現在から未来へと向かう「わたし」の実存のベクトルに合致したものになっているかどうか重視されます。この点から、たとえば実現が遠い未来の話であっても、利用者にとって現時点における関心が十分に大きい目標・課題（いわゆる夢や希望）ならば、計画に盛り込んでもいまの生を抑圧することはないでしょう（むしろ夢や希望の存在は、通常われわれの日々の生活を明るくするものです）、逆に、客観的に見てどんなに差し迫った案件であっても、利用者にとっていま切実ではない課題であるなら、計画に盛り込んでうまく機能しない可能性が高いと考えられます。

そのため、計画作成にあたって支援者には、いまの「わたし」が抱えている様々な欲求・欲望に対して、その勢いを殺すことなく、未来に向かうように効果的に交通整理を行うこと、要は利用者に対して（奇しくも冒頭で述べたことと表現が重なりますが）この現実（現在）から地続きの「希望」のヴィジョンとして計画を示すことが、彼らの現在の生を豊かにし、同時に未来に向けてその背中を後押しする（エンパワメントする）支援として求められているのです。

3. 「わたし」が中心にある障害者ケアマネジメントを求めて

(1) ケアマネジメントへの「わたし」の主体的な参画

さて、上記のほかにもう一点、われわれ勉強会には従来の障害者ケアマネジメントに対する不満がありました。それは、このモデルの名称からもわかるように、ケアマネジメントが「わたし」（利用者）中心にはなっていない、ということでした。

もちろん、従来のケアマネジメントが、利用者の存在をないがしろにしていたという訳ではありません。むしろ、もともと日本におけるケアマネジメント手法の導入が、行政主体の措置制度から利用者主体の契約制度（介護保険や支援費）への移行を補完するためであることからわかるように、利用者中心の考え方はケアマネジメントにおいて本質的な要素です。そして、利用者中心の理念を突き詰めていくと、究極的にはセルフ・ケアマネジメントに行き着くと思いますが、「セルフ・ケアマネジメントの困難な利用者に対するケアマネジメントを、どこまでセルフ・ケアマネジメントに近づけることができるか」が、すべてのケアマネジメント理論の背景にある問題意識だと思います。

そこで、従来の障害者ケアマネジメントにおける「利用者中心」の中身を振り返ってみますと、それは、ケアマネジメント過程の各ステップにおいて「利用者の意思を尊重すること」であったり、ケアマネジメントを実施するにあたって「利用者のエンパワメントや権利擁護を重視すること」であったりしました。もちろん、これはこれで重要で意味のあることですが、ここでの利用者はケアマネジメントの受け手、つまりケアマネジメントの客体としての位置づけであるといえるでしょう。ケアマネジメントにおける主体性は支援者の側にあり、利用者は「してもらう」だけのお客さん扱いなのです。

しかし、ケアマネジメントもまた利用者の生の一部を構成する以上、それは外側から押し付けられ生のあり様を規定する枠組みのようなものではなく、「わたし」によって内的に「生きられる」ものでな

ければならないはずですが。そして、そうであるためには、ケアマネジメント過程を、「わたし」が主体的に関われるプロセスに変えていくことが必要です。ケアマネジメントは誰のものなのか——「わたし」のケアマネジメントである——という権利問題の面と、利用者にこの生の主体は自分であるという手ごたえを感じてもらうことによって、彼らのエンパワメントが図られるという支援効果の面、この両面から利用者の主体的な参画が要求されるでしょう。

それゆえ「わたし」モデルでは、ケアマネジメントへの利用者の主体的な参画という観点から、ケアマネジメント過程における利用者の「役割」を重視し、利用者に2つの役割を用意します。ひとつは「計画作成者」として作成作業に積極的に参加してもらうことであり、これは自己決定の手ごたえを感じることに繋がります。もうひとつは、計画の実施において利用者が果たす役割と支援者の役割とが計画上に明示されることで、「計画実施者」として自らの手で自身の生活を作り上げていくということが利用者にわかりやすく示され、これは自己実現の手ごたえを感じることに繋がるでしょう。この2つの手ごたえが、彼らの生を内側から豊かなものにすると考えられるのです。

(2) “とことん「わたし」中心” のさらなる追求を

「わたし」モデルの解説としては、ここで終わってもいいのですが、最後に、私の個人的な問題意識による、勉強会でも議論されていない論点に触れさせてもらいます。それは “とことん「わたし」中心” というコンセプトには、さらに先がある、ということです。

私が個人的に従来のケアマネジメントに対して感じている問題は、それが利用者と支援者との間に存在する横断不可能な断絶というか、両者の間に成立してしまう共約不可能な関係性——端的に言えば支援者が上位に立つ権力関係ということですが——に対して、あまりにも鈍感であることです。先に「どこまでセルフ・ケアマネジメントに近づけることができるか」が全てのケアマネジメント理論のテーマであると述べましたが、そこではセルフ・ケアマネジメントの困難な利用者の代弁者として、あまりにも安易に支援者が位置づけられているように感じられて仕方がありません。かりに利用者の自己を「わたし」、支援者の自己を〈わたし〉と表現するならば、全てのケアマネジメント理論は、そこでどれだけ支援者が利用者の意思を汲み取り、利用者の意思を反映した生活の実現について真摯に考えられたものであったとしても、支援者の視点に立つものである限り、それは “〈わたし〉中心モデル” だといえるでしょう（この意味で、真に“「わたし」中心モデル” と呼べるのは、セルフ・ケアマネジメントしかないということになります）。

では、なぜ “〈わたし〉中心” が問題なのか。意思能力にハンディキャップのある人たちの支援に直接に携わったことのある人は経験されていると思います、どれだけ相手の立場になって考えているつもりであっても——というよりは、相手の立場に立って考えようとすればするほど——、いつしかその思考は〈わたし〉の頭の中でモノローグ（独言）の無限ループに転化し、気づけばそこには「わたし」の仮面を被った〈わたし〉しか存在していない、ということに。つまり、〈わたし〉が「利用者中心」をどれだけ強く意識し、また、利用者との話し合いや協働などの手続をケアマネジメント過程に組み入れたとしても、それが〈わたし〉の世界の中で完結したものである以上、この〈わた

し〉の独りよがりの構造を本質的には克服できていないと考えられるのです。それゆえ、この〈わたし〉中心性を相対化するために、「わたし」という“他者”を、その他者性を損なうことなくケアマネジメントに導入しなければならないと思います。それが具体的にどのようなイメージになるのか、私自身よくわかっていませんが、おそらく〈わたし〉と「わたし」の間の緊張関係をベースに、相互の影響関係や変容過程を組み込んだ、二項モデルとしてケアマネジメントを構想することになると思います。

以上の問題意識は、今回提示する「わたし」モデルにおいても本質的に克服されている訳ではありませんが、「わたし」モデルにはその克服の萌芽的なヒントが含まれています。それは、計画作成における「支援者が担う責任」「本人が担う責任」のところです。これはケアマネジメント過程において、〈わたし〉と「わたし」の間に「責任」という形で区切り線が入ることを意味しますが、この「本人が担う責任」というラインを通して、〈わたし〉は、〈わたし〉の世界の彼岸としての「わたし」との“出会い”をはじめて経験することになるのかもしれませんが……。

最後に。「わたし」モデルは、未だ試行錯誤の途上にあり、決して完成したものではありません。今回の講習会で皆さんにこの手法を学んでいただき、現場に持ち帰って実践してもらい、その経験をもう一度持ち寄って、さらによいものになるよう検討を積み重ねていきたいと考えています(と主催者は考えていると思います)。

この探求の旅に、ぜひ皆さんも参加しましょう！

注(1)以下「1. モデルの概要」の執筆にあたっては、講習会の案内ビラの文章(森本さん作成)を一部引用させていただきました。

(2)今回講習会で提示するのは紙製のアセスメントシートですが、パソコンでアセスメントデータを管理して、任意の時点の利用者の全体像のスナップショットを表示したり、特定の項目の過去から現在までのデータを時系列で呼び出すことができるようなプログラムを開発できれば(技術的には充分可能だと思われます)そっちの方がよいように個人的には思います。

賛助会員にご協力をお願いいたします



賛助会員の皆様、ご協力いただきましてありがとうございました。賛助会費を頂くだけで、機関紙も滞ったままで申し訳ありません。皆様の支えのおかげで法人化して6年目の決算を終えることができました。なお平成18年度事業報告・決算、平成19年度事業計画等につきましては当法人のホームページ(<http://www.sou-sou.com>)に掲載しておりますのでそちらをご覧ください。

なお、賛助会費を御振込いただく場合は下記の郵便振替口座にお振込み願います。

一口:2,000円 振込先(加入名):そうそうの杜 口座番号:00940-5-185986

賛助会費(平成19年04月01日~08月20日にご支援いただいた方)

青木 眞二	明石 令子	荒木 賢二	荒木 栄子	荒木 めぐみ
新井 克也	安藤 佐江子	井口 友子	板谷 千代子	市川 毅
今田 寿孝	岩井 宏氏	岩井 美穂子	岩尾 恵津子	上田 史郎
植田 彌生	占部 泰崇	大熊 章夫	小澤 温	小田原 清美
大谷 眞造	大屋敷 百合子	海田 正男	柏木 諭	数田 博保
数田 義治	片山 勇哉	金子 末子	金原 正純	川端 房子
河本 芙美子	神田 昭次	岸部 拓朗	北島 太郎	倉住 勲
来山 秀子	櫻井 はす代	澤 ふみ子	椎木 明美	塩野 博
塩本 昌三	塩山 とも子	勝賀野 淑子	進藤 康二	杉田 久
太居 千晶	太居 久実	田島 ひとみ	竹中 康豊	竹森 久起
谷本 まつえ	中山 和代	橋本 千鶴子	橋本 喜義	橋本 陽子
花木 眞	浜口 慶子	原 昌子	原田 鷹男	平野 サトミ
松井 富士子	松浦 邦和	松本 アサノ	水谷 晴美	三宅 克英
三宅 麻衣子	室 宣子	山本 大助	横川 清隆	吉田 正子
渡辺 勇雄	渡辺 沙淇子	渡辺 晴菜	綿谷 陽子	池岡診療所
ミナミ商会	夢空間	昭和ツーリスト	NPO 法人ころろタイフーン	

NPO 法人のんきもの

(敬称略、順不同)

一般寄付(平成19年04月01日~08月20日にご支援いただいた方)

荒井 洋一	石井 敏一	面高 雅紀	大蔵 啓克	北野 光浩
塩本 省三	清水 成人	藤野 正行	竹本 伊津子	土山
春本 静良	吉岡 和子	吉見 重則	春木 重光	アイラック(株)

双基

(敬称略、順不同)

その他、地域の方々に牛乳パックや様々な物品等、ご寄付を頂いておりますことを心より感謝申し上げます。

ありがとうございます。

(財団)中央競馬馬主社会福祉財団 様より、助成金が決定されました。

平成 17 年度 財団法人中央競馬馬主社会福祉財団 社会福祉施設整備費補助事業として、210 万円の助成を受け、日産キャラバンを購入させていただきました。車椅子が 3 台搭載できるリフト車で、利用者さんへの負担も大きく軽減され好評を得ております。ありがとうございました。



(社福)大阪府共同募金会 様 より、配分金が決定されました。

平成 18 年 10 月に実施された共同募金により、配分金 3 万円が決定されました。共同募金にご協力いただいた住民(寄付者)の皆様には感謝いたします。配分金は施設整備費としてトイレ用手すりとして有効適正に活用させていただきます。どうもありがとうございました。



社会福祉法人 ^{もり} そうそうの杜

大阪市城東区鳴野東3丁目18-5

Tel : 06 - 6965 - 7171 Fax : 06 - 6167 - 2622

ホームページ : sou-sou.com E-mail : sou-sou@gol.com

地域生活支援センターあ・うん 相談支援事業 居宅介護支援事業

とことこと 居宅介護・重度訪問介護・移動支援

大阪市城東区鳴野東 3-18-5 Tel 06-6965-7171 Fax 06-6167-2622

庵げんげん 生活介護

(主)大阪市城東区中 1-6-23(庵) Tel/Fax 06-6935-0909

(従)大阪市城東区関目 2-6-4(げんげん) Tel/Fax 06-6935-1727

創奏座座 就労移行支援・就労継続支援 B 型

(主)大阪市城東区中央 1-7-27(創奏) Tel/Fax 06-6935-3794

(従)大阪市城東区鳴野西 4-17-23(座座) Tel/Fax 06-4258-6013

(従)大阪市城東区関目 1-14-21(つむぎ館) Tel/Fax 06-6933-7269

山下紙器 就労移行支援・就労継続支援 B 型

大阪市平野区長吉川辺 2-8-58 Tel/Fax 06-6706-1022

想縁綾 ケアホーム

大阪市城東区内3ヶ所

添 短期入所施設・日中一時支援

大阪市城東区鳴野西 5-18-13 Tel/Fax 06-6965-1235

編集後記

お待たせいたしました。好評を博している連載を待って、若干名の方には次はいつ出るのかと急かさされ、その間に大きなウネリに巻き込まれていることにやっと気がついた次第です。何故この仕事を生業としているの？新たな動きに大きな虚脱感を抱きながら・・・でも・・・よしっ！やるかっ！初心にかえって熱い思いをお届けいたします。 (あ)

